

《論 説》

「生きた研究史」をめざして

—— ヴェルナー・エック教授の講演に寄せて ——

南 川 高 志

本誌第5号の巻頭に掲げたヴェルナー・エック教授の論文の邦訳は、2005年3月6日に京都大学大学院文学研究科において開催された国際シンポジウム「近代ヨーロッパにおける人文主義の継承と変容——政治文化・古典研究・大学——」の席上でなされたドイツ語による報告に、シンポジウム終了後改訂を施し註を補ったものに基づいている。ドイツ語原文とここに収録した宮坂康寿氏による邦訳の両方が、小山哲氏と私が編集した以下のシンポジウム報告書にまず掲載された。

Takashi Minamikawa & Satoshi Koyama (eds.), *Continuity and Change of the Humanism in the Modern Europe— Political Culture, Classical Studies and University(Proceedings of the International Symposium, March 2005 at Kyoto University)*, Kyoto University, Kyoto, Japan, 2005 ドイツ語原文は43～64ページ、邦訳は141～160ページにそれぞれ収められている。

しかし、このシンポジウム報告書は、国内外の限られた範囲の方々や研究機関に配布されただけであるため、西洋古代史に関心のあるより多くの方々に読んでいただけるよう、本誌に邦訳を再度掲載することにした次第である。

さて、ヴェルナー・エック教授は1939年ニュルンベルク市の生まれで、同市のギムナジウムを経て、ニュルンベルク北方のエアランゲンにあるエアランゲン・ニュルンベルク大学で学んだ。卒業後も同大学に研究スタッフとして勤務したが、1975年にケルン大学において教授資格を取得した後、ザールラント州ザールブリュッケンにあるザールラント大学の古代史教授となった。そして、1979年にケルン大学古代史正教授に就任し、今日に至っている。

同教授の主たる専門分野は、ローマ帝政時代の政治、法制、そしてローマ時代のケルン市の研究である。教授の研究は、まずローマ帝政盛期の公職や公職就任者の徹底的な調査・検証を通じて、ローマ帝国の行政システムとその本質を明らかにすることにある。1970年発表の最初の著書 *Senatoren von Vespasian bis Hadrian. Prosopographische Untersuchungen mit Einschluß der Jahres- und Provinzialfasten der Statthalter* は、1世紀後半のウェスパシアヌス帝から2世紀前半のハドリアヌス帝時代までに就任した属州総督を、プロソポグラフィッシュな手法で明らかにした研究で、1979年公刊の第2番目の著書 *Die*

staatliche Organisation Italiens in der Hohen Kaiserzeit では、帝政時代のイタリアに関わる国家公職者と制度が精査されている。そして、その後のこの方面の研究をまとめて、*Die Verwaltung des römischen Reiches in der Hohen Kaiserzeit. Ausgewählte und erweiterte Beiträge* と題した著書として、1995年に第1巻を、1998年に第2巻目を刊行している。こうした教授の研究によって、帝政期ローマ国家の統治構造が詳しく明らかになっただけでなく、元老院議員をはじめとするローマ社会の指導的階層の実態もいっそう明確になったと私は評価している。

プロソポグラフィッシュな手法を重視するエック教授は、その主たる史料であるラテン語碑文についても、テキスト刊行から分析、解釈、そして史料集編纂に至るまで、数多くの業績を産み出している。同教授はドイツにおけるラテン碑文学に関する第一人者といって過言ではない方である。さらに、ローマ時代の有力な属州都市であったケルンについて、2004年に実に862ページに及ぶ大著 *Köln in römischen Zeit: Geschichte einer Stadt im Rahmen des Imperium Romanum* を刊行したが、この作品も、考古学的な知見だけではなく、むしろ教授のケルン市関係碑文に関する十分な研究を踏まえて書かれたものといえよう。

エック教授の執筆活動は論文や研究書ばかりでなく、啓蒙的な書物にも及んでおり、例えば1998年に出版された *Augustus und seine Zeit* は、イタリア語、スペイン語、そして英語にも訳されて、広く読まれている。わが国では、私自身を含めて帝政前期を研究する者が早くから同教授の研究を参照してきた。すでに、大論文集 *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt* の第2巻1に教授が寄稿した論文 *Beförderungskriterien innerhalb der senatorischen Laufbahn, dargestellt an der Zeit von 69 bis 138 n. Chr.* (1974年) を、豊田浩志氏が1975年に丁寧に紹介している (『西洋史学報』復刊第3号)。また、先述の1995年刊行の論文集第1巻を、新保良明氏が『西洋古典学研究』第46巻 (1998年) 誌上で書評している。

エック教授の現在までの著書や論文等の研究業績は500点以上にのぼり、また多方面にわたるので、ここで充分紹介することは難しいが、帝政初期の政治史を長らく専門としていた私は、教授の精力的な仕事ぶりにかねてより敬服していた。近年、私が渡独した折に2度、ケルン大学で教授と面会し、ドイツのローマ史学界や大学の現状などについて話をうかがったが、本年3月に初めて来日された時にはさらに多方面にわたる御意見を聞くことができた。噂通りエネルギッシュな教授に親しく接することができ、膨大な数の研究業績を産み出すそのパワーを私は幾分か理解したような気がしている。残念なことに、教授の真似をすることは到底できそうもないのであるが。

ところで、以上のような研究を専門分野とする教授には、来日時にも本来ならばローマ帝政時代の帝国統治に関わる問題やラテン碑文の研究に関する講演を依頼すべきであったかもしれない。しかし、私が教授にお願いしたのは、京都大学文学研究科採択COEプログラム中の私がリーダーを務める1小研究会が実施しているプロジェクトに沿った「ドイツ

における古代史研究の発展とその意義」に関する講演であった。ドイツの正統的な古代史研究を実践してきた教授ならばこそ、この課題をこなしていただけるものと確信していたからである。そして、私の期待通りに、教授はシンポジウムの趣旨に添った報告をしてくれ、討論にも積極的に応じてくれたのであった。この機会に教授の御好意に改めてお礼を申し上げたい。

教授が講演されたシンポジウムは「ヨーロッパにおける人文学知形成の歴史的構図」という研究会が主催したものである。この研究会の趣旨や目的などについては、すでに同研究会が数度にわたって発行しているニューズレターや研究会のホームページ (<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurohum/>) に私自身が幾度か書く機会があったので、読者にはぜひそれらを御覧いただきたい。この研究会の目的は、ごく手短かにいえば、人文学やそれを支える精神のヨーロッパにおける発展を、歴史学を主たる方法としながらも、多面的、多次元にわたって、かつ内在的に考察してゆこうというものである。ヨーロッパにおける人文学の基盤となった学問は、ルネサンス以来の、そしてもっと淵源を辿れば古代ギリシアに行き着くところのいわゆる古典学である。19世紀以降の古典学研究の発展の中で、古代史研究は古典文献学からいわば自立して、古典学の重要な部門として成長していった。この主たる担い手となったのはドイツの学界であり、19世紀以降のドイツの古典学と古代史の動向を明らかにすることは、ヨーロッパにおける人文学の発展のきわめて重要な局面を理解することに繋がるのである。

従って、本誌で私がエック教授の講演に若干のコメントをするとすれば、当然上述のような研究会やシンポジウムの趣旨に沿っておこなうべきかもしれない。エック教授が講演されたシンポジウムでは、同じ19世紀におけるイギリスでの古典学と大学をめぐる状況についても報告があったが、そうしたヨーロッパのほかの国々との比較においてドイツのケースを考えるようなコメントをすることが望ましいかもしれない。しかし、ここで私がそれを十分なしうる準備は今はなく、またそうした作業を近い将来研究会の共同論集の形でおこなう予定があるので、ここではかねてより私自身が考えていたささやかな希望を述べるにとどめたい。

エック教授が解説されたのは、19世紀におけるドイツの古代史学界の発展であったが、いうまでもなくこの時期のドイツは、単に古代史だけではなく、歴史学そのものの近代的基礎が確立された時期でもあった。ニープールに次いでレオポルト・フォン・ランケが史料批判に基づく近代的歴史学研究を築いたことは、高校世界史レベルでも基本的知識に属するといつてよいほど、わが国でも周知の事実である。19世紀ドイツにおける歴史学の発展はいわゆる「西洋史学史」の最も重要な局面であり、これと並ぶほどに重みを持って語られる史学史上のトピックは、このドイツ史学に対抗したフランスのアナール学派の形成と発展くらいではなからうか。

ところで、わが国では第2次世界大戦以前より、この19世紀ドイツにおける歴史学の発

展はたいへん重要視されてきた。これは、日本の歴史学界、とくに国立大学で教育・研究された歴史学（官製史学）が、ランケの高弟ルードヴィヒ・リース（1861-1928年）によって帝国大学文科大学にもたらされたドイツ史学に大きな影響を受けたことに、まずは拠っているであろう。しかし、それ以上に、ドイツの歴史学研究や歴史思想が、第2次世界大戦前の日本の学界や言論界にとってきわめて魅力的な存在と見える内容を備えていたのである。ところが、第2次世界大戦後は、そうしたドイツの歴史学思想をいわば断罪するような形でわが国の歴史学界の動向は推移した。19世紀ドイツ歴史学が主たる研究分野とした政治史や外交史は遠ざけられ、社会経済史、そして社会史が台頭した。19世紀ドイツ歴史学は、アナール学派や旧西ドイツの「社会史学派」などの発展を説明するための踏み台として使われるだけで、正面から取り上げられることはきわめて少なかったように思われる。唯一の例外はヤーコプ・ブルクハルトであるが、いうまでもなくこの偉大な歴史家は、19世紀ドイツの正統歴史学とは異なる道を歩んだ人であった。

第2次世界大戦以前よりなされてきたドイツ歴史学のわが国での扱いは、まずはニープールの『ローマ史』に始まり、フリードリヒ・マイネッケ（1862-1954年）に至るまでの主要な歴史家の著作の紹介であった。それとともに、そうした歴史研究や歴史叙述が当時の時代状況、つまりナポレオン戦争から国民国家形成、そして第1次世界大戦へと劇的に進んだドイツ史の展開といかに関係していたのかが論じられてきた。当時のドイツの歴史家には政治志向の学者が多かったので、これは当然でもあった。ニープールの、ドロイゼン、そしてなかんずくモムゼンがその代表例といつてよいであろう。

こうした扱いが私たちに多くの知見を与えてくれたことはいふまでもない。ただ、古代史の研究者として考えておきたいことがある。他の研究分野はともかくとして、古代史研究の場合、その研究史、学説史を19世紀の研究からスタートさせねばならない。先行学説の理解は、21世紀初頭の今日でも深く達成される必要がある。その際、先行の学説を著作から断片的に切り取って検討するだけで満足し、その学説の形成された背景を考えない研究史の扱いは厳に諫められなければならないが、その背景の理解がこれまで実践されてきた場合でも、先に述べた政治的背景や個人的な思想などに大まかに還元されることが多かったのではなからうか。例えば、ローマ史のモムゼンの扱いがこの点で容易に想起される。

私が重視したいと思うのは、そうした大まかな背景だけでなく、学説、そして研究を生み出した学者、歴史家の日常レヴェルで、かつ直接的な背景、具体的には研究がおかれた環境の問題である。それは、ドイツの場合、大学やアカデミーなどの問題に還元できるかもしれない。歴史研究者は個々人が個別にテキストの分析と思弁を重ねて研究と叙述をおこなっただけではない。私人として行動した歴史家が目立つイギリスのケースと異なって、ドイツの場合とはとくに大学という組織の中で研究者は活動したし、さらにエック教授が書いているように、19世紀の後半以降、歴史研究者の個人的な研究を越えた次元での組織的な活動が本格化している。もちろん、ドイツにおける大学など研究機関や教育の研究はこ

れまでわが国でも多面的におこなわれてきた。しかし、個々の専門研究者の学説史、研究史の検討にそうした背景への配慮はなかったのではないかと、私自身の研究の歩みを含めて感じるのである（例外はまたもやブルクハルトの場合で、仲手川良雄氏や森田猛氏の研究はたいへん示唆的である）。

たとえば、かのテオドール・モムゼンの場合、1848年の革命やドイツの統一に情熱をもって関与し、統一後は帝国宰相のビスマルクと激しく対立したことが知られ、そうしたことが彼の著作と密に関連してきたことが指摘されてきた。しかし、そのモムゼンは、政府を通じ、国家から莫大な資金を得て研究を組織的に展開している。ビスマルク政治を宰相絶対主義と批判しつつ、実はモムゼン自身が学界ではビスマルク的存在であったと考えることもできよう。『ギリシア史』4巻や『ギリシア・ローマ世界の人口』などの著書があるカール・ユリウス・ペーロッパは、このモムゼンと合わず、ドイツで職を得ることができなかったが、彼がイタリア、ローマ大学において古代史教授となって活躍したために、イタリアのローマ史学界が大きく進歩したという事情も存在する。

エック教授の講演は、シンポジウムの趣旨とは別に、ドイツにおける大学制度や研究活動の中に古代史を置いて説明されたという点で、私は非常に貴重なものであると思っている。教授が註で断っているように、講演は限られた時間であったために、古代史研究全体にわたって十分な論究がなされているわけではないが、私の希望している次元でもドイツ古代史研究の流れを簡潔に語ってくれている。ただし、私のような日本人研究者には重要と感じられるところが、ドイツの正統派の古代史研究者である同教授には重く感じることがない場合もあると思われる。こうした点をも深めつつ、ドイツ、そしてヨーロッパにおける古代史研究の発展を正確に理解してこそ、初めて十全な研究史、学説史が用意でき、そこからオリジナリティに富む研究を開始することができるのではなからうか。

ここ10年ほどの間の国際交流の急速な進展によって、わが国の西洋史学界と本場ヨーロッパの学界との距離は、専門研究者のレヴェルでも専門家を目指す大学院生のレヴェルでも急速に縮まった。学説史や研究史、あるいは史学史すらも、もはや著作を読んだだけの理解で書くことはできなくなってしまったと私は考えている。旧来からなされていた国家や思潮のレヴェルだけでなく、研究者や歴史家をめぐる日常の活動の状況まで理解した上で、学説史・研究史は構築されることが必要である。そうしたあり方を「生きた研究史」と私は呼ぶことにしたい。個々の専門分野での「生きた研究史」を書く努力こそが、いつかは総合されて、有名な著作の紹介と感想にとどまらない「生きた史学史」へと繋がってゆくのだと信じたいためである。

【追記】

ここで述べた見解に関連する私自身の古代史研究観を述べたものとして、以下のようなものがあるので、参照いただければ幸いである。

- ・「西洋古代史研究とヨーロッパ・アイデンティティ」『人文知の新たな総合に向けて』（京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム第2回報告書I：歴史編）、京都大学、2004年3月、183～192ページ
- ・「テオドール・モムゼンと古代史研究の確立」『歴史と地理：世界史の研究』204号（山川出版社）、2005年8月、1～17ページ